四国大学紀要，(A) 49：13－22，2017
Bull. Skikoku Univ. (A) 49：13－22，2017

A県における子育て支援イベントの利用実態

中岡泰子，小川佳代，富田喜代子，加藤孝士，
兼間和美，永井知子，横関恵美子，吉村尚美，
高橋順子，高田律美，永吉　円，中澤京子，
三木章代，新居アユ子，湯浅貴実子

Survey on the Use of Child Care Support Events in A Prefecture

Yasuko Nakaoka，Kayo Ogawa，Kiyoko Tomida，Takashi Katoh，
Kazumi Kanema，Tomoko nagai，Emiko Yokozeki，Naomi Yoshimura，
Junko takahashi，Norimi Takata，Madoka Nagayoshi，Kyoko Nakazawa，
Fumiyo Miki，Ayuko Nii and Kimiko Yuasa

ABSTRACT

The purpose of this paper was to clarify the uses of child care support events in A Prefecture. In order to achieve this purpose, the data were collected from 212 mothers who attended the childrearing support events. The major findings can be summarized as follows :

1) Mothers had a child care while participating in various events of the region, such as events that parents and children can participate in together, parenting consultation, exchange meeting between the mother.
2) Many of the mothers had buffered the anxiety of parenting in the participation in the child care support.
3) As parenting support for universities, there were many mothers who desired the child-rearing events, a place where parent-child and student exchange.

Keywords：childcare support, exchange between parent-child and university student, event

Ⅰ．研究動機と目的

現在の日本では，核家族化，少子化の進展に伴い，家庭が孤立し，地域のつながりが希薄になり，家庭や地域の養育機能が低下している。その結果，子育て中の母親は子育て不安や子育て負担を感じている。これを軽減するために，地域においては積極的な子育て支援のネットワーク作りが求められている。

そのような中，筆者らは平成24年度から新たな子育て支援システムの構築を目指して共同プロジェクトを立ち上げ，大学が地域の子育て支援の拠点の一つとしてどのような取り組みができるのか検証してきた。平成24年度に実施した徳島県内の子育て中の母親を対象にした育児ストレス状況調査では，母親の育児ストレスには自分一人で子育てをしていると捉えることが強く影響し，子育ての悩みには子どもの健康や発達のことだけでなく，子どもとの接し方や祖父母との関係など多岐にわたり，トータルな子育て支援を求めていることが分かった[1～3]。

そこで，平成25年からは地域子育て支援センターを中心とした支援への参画や，大学主催の子育て支援イベントの企画・実践などを行ってきた。中でも，「子育てママのリフレッシュ企画」は10数回を数え，平成27年度からはさらに遠隔地（県南部・西部地区）でも催し，活動範囲を広げている。イベント後には，毎回母親同士の交流を目的とした「ママカフェ」を開催し，その場には大学専門職者も参加し育児相談も行っている。その様子から，母親は顔見知りの信頼関係の取れた仲間同士の情報交換や，

日頃の状況を良く知ってくれている専門職者の指導や助言を強く求めていることが分かってきた[4)]。

現在，地域の保育所・幼稚園・認定こども園では，地域の子育て支援の拠点として様々な子育て支援イベントが開催され，気軽に子育て相談を受けられる体制作りが進んでいる。一方，我々が実施している子育て支援イベントには数十名の学生ボランティアの他，保育学，小児看護学，母性看護学，公衆衛生看護学，家族看護学など異なった専門職者が協働して取り組んでいることが特色である。

本研究では，大学を拠点とした子育て支援活動を新たに進めるにあたって，どのような役割が求められているのか探るべく，まず，就学前の子どもを持つ母親がどのような子育て支援イベントに参加しているのか，また，どのような支援を大学に求めているのか調査し明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

1．調査の手続き

平成29年２月～３月に，四国大学主催の子育て支援イベントの実施会場，四国大学附属認定こども園・乳児保育所・保育所のわんぱく教室会場，県内認定こども園２園及び県内地域子育て支援センター３か所において，就学前の子どもを持つ母親212名を対象にアンケート調査を実施した。

わんぱく教室は，徳島市内26か所の保育所や認定こども園において，１日の大半を家庭で保育している保護者と子どもを対象に，子ども同士，親同士の交流の場として，週１回程度，開催されているものである。子どもの遊びや育児講座など様々なイベントの開催だけでなく，保育士に育児相談することもでき，子どもとのかかわり方や発達など育児不安を解消することもできる。

調査方法については，まず，子育て支援イベントに参加した母親に対しては，子育て支援イベント実施後に調査を実施した。調査に関するお願いを文書と口頭で行ってから調査票を配付し，調査への協力が得られる場合に，その場で記入してもらい，封筒に入れてもらい回収した。

認定こども園，わんぱく教室，地域子育て支援センターに通っている母親に対しては，各施設の職員の協力を得て，調査票を利用者に配布してもらい，留め置き法により各施設に設置した回収箱に投函してもらった。

調査対象者の内訳は，四国大学主催の子育て支援イベント参加者18名（8.9％），四国大学わんぱく教室参加者51名（24.1％），県内認定こども園に通っている母親35名（16.5％），地域子育て支援センターに通っている母親108名（50.9％）であった。

2．調査対象の属性

調査対象者である母親の年齢は，20代が43名（20.3％），30代が129名（60.8％），40代が34名（16.0％），無回答が６名（2.8％）であった。

職業は，無職が118名（55.7％）で最も多く，次いで育児休暇中が58名（27.4％），有職者が35人（16.5％），無回答が１名（0.5％）であった。これは，本調査の対象者が地域子育て支援センターを利用している親が半数以上を占めていたことが影響しているものと考えられる。

世帯類型は，176名（83.0％）が核家族で最も多く，次いで３世代世帯が29名（13.7％），その他が２名（0.9％），無回答が５名（2.4％）であった。

子育てを支援してくれる人として，配偶者の他に祖父母等の援助がある人が147名（69.3％）で最も多く，次いで「配偶者のみ」と答えた人が47名（22.2％）で，配偶者の支援はないが祖父母等の援助がある人が17名（8.0％），無回答が１名（0.5％）であった。このことから，祖父母とは同居していないが，祖父母の支援が受けられる近居の居住形態をとっている家族が多いと推測された。

子ども数は，子ども１人が104名（49.0％）で最も多く，次いで子ども２人が83名（39.2％），子ども３人が23名（10.8％），子ども４人が２名（0.9％）であった。

3．調査の内容

調査内容は，対象者の属性及び「これまでに参加した子育て支援イベント（自由記述）」「大学に求め

る子育て支援（自由記述）」「母性意識」「子育て支援イベント参加によるリフレッシュ意識」の項目で構成され，学内倫理審査委員会の承認を得た後，実施した。また，調査の実施にあたっては，調査を依頼した認定こども園や地域子育て支援センターの施設長に調査の目的と方法，内容を説明し，承諾を得た後に施設に持参して対象者に配布した。

母性意識については，12項目からなる「母性意識尺度」（大日向，1988）[5] を用いた。この尺度は，母親自身が母親であることを肯定的にとらえている「母親役割に対する積極的・肯定的受容の尺度」と否定的にとらえている「母親役割に対する消極的・否定的受容の尺度」で構成され，普段感じている気持ちを「そのとおりである」から「違う」の４段階評定で回答してもらうものである。

子育て支援イベント参加によるリフレッシュ意識に関する項目については，子育て支援イベントに参加後の気持ちやリフレッシュ度を知るための32項目を設定し，「そのとおりである」から「違う」の４段階評定で回答してもらった。

Ⅲ．結果及び考察

１．母性意識の実態

図１は，日頃の子育てにおいて感じている感情について，「そのとおりである」と「どちらかといえばそうである」を合わせた割合の高い順に示した結果である。割合が最も高かったのが，「母親になったことで人間的に成長できた」で98.1％を示し，次いで，「母親であることが好き」95.7％，「母親であることに充実感を感じる」91.5％，「母親であることに生きがいを感じている」89.1％と，約９割の人が肯定的な母性意識を持っていることが分かった。「母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた」という意識については70.2％，「母親としてふるまっているときが一番自分らしいと思う」という意識については67.5％と，約７割程度にとどまった。

図２は，否定的母性意識の実態で，肯定的母性意識同様に，「そのとおりである」と「どちらかといえばそうである」を合わせた割合の高い順に示した結果である。「母親であるために自分の行動がかなり制限されている」と感じている母親が最も多く64.0％を示し，次いで，「自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」39.6％，「育児に携わっているあいだに，世の中から取り残されているように思う」37.3％と，約４割の人が社会からの乖離，それに対する焦りともとられる意識を持っていることが分かった。「自分は母親として不適格なのではないだろうか」という意識については28.6％，「子どもを育てることが負担に感じられる」という意識については26.9％の人が「そうだ」と捉えており，約３割の母親が不安を抱えながらの子育てを行っている姿が伺えた。「子どもを産まないほうが良かった」と感じている母親は1.4％と僅かであるが，子育てのストレスから虐待につながりかねない深刻な状況の母親がいることも無視できない。

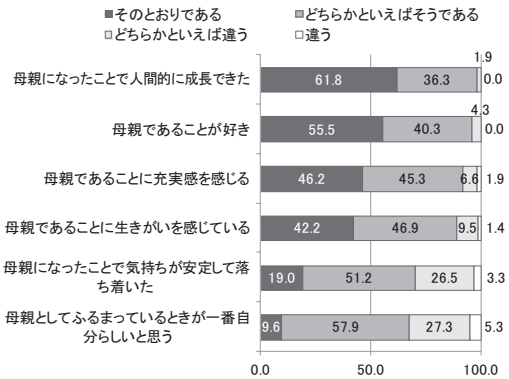

図１　肯定的母性意識

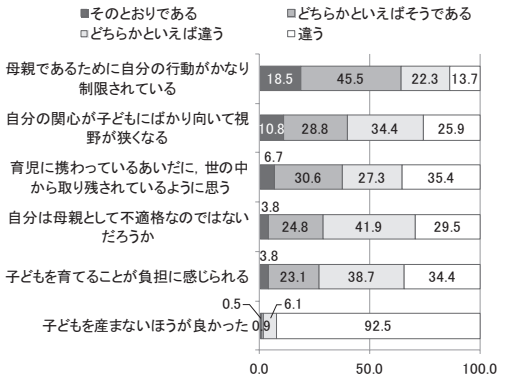

図２　否定的母性意識

以上のことから，多くの親が肯定的な母親意識を持ちつつも，悩みや不安を抱えながら子育てをしている実情が伺えた。

2．子育て支援イベント参加後の意識の実態

次に，子育て支援イベント参加後の感想を尋ねた。図３は，子ども同士の交流についての意識であるが，９割以上の母親が「子どもも交えて，一緒に楽しめる」(97.4%)，「子どもと一緒に遊んでくれる」(93.3%）といった子どもの交流の場として満足していることが分かった。また，「子どもの面倒をみてくれる」と回答した母親も 82.0%おり，子育ての社会化を実感している母親も多いことが分かった。これらの意識の高さは，母親が共同養育の欲求を強く持っていることの表れとも考えられる。

図４は，母親同士の交流についての意識であるが，「母親同士，気持ちが通じ合い悩みを共有できる」(92.8%)，「同世代の子どもを持つ母親と一緒にいると心が落ち着く」(89.7%)，「同世代の子どもを持つ母親と一緒に気軽におしゃべりができ楽しい」(89.4%)，「母親同士，互いに分かりあえて元気になる」(89.7%）といったように，約９割の母親が親同士の交流の場として満足していることが分かった。また，「自分も他の母親の話を聞いてあげたいと思う」と答えた母親も94.8%とおり，周りからの支援を受けるだけなく，支援をする側になりたいという母親も多いことが分かった。「新たな母親仲間ができる」と答えた母親も84.0%と多いが，約１割強の母親は「違う」と答えていた。今回の調査対象者の多くが地域の子育て支援センターに通っている母親であったことから，同じ地域に住んでいる母親同士の交流にとどまり，新しい母親仲間が得られにくい環境にあることが影響していると考えられる。

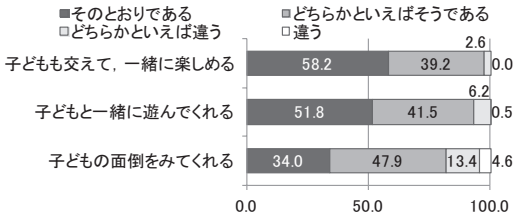

図３　子ども同士の交流

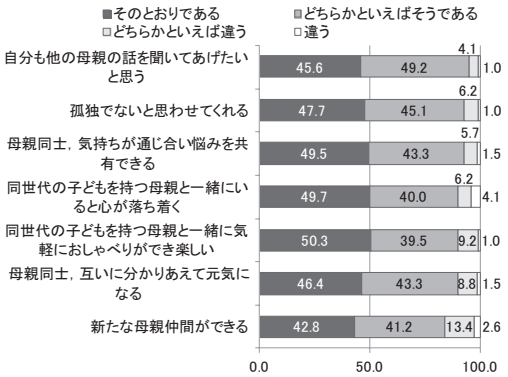

図４　母親同士の交流

図５は，子育て支援イベント実施後の育児不安解消やリフレッシュ意識を尋ねたものである。94.8%の母親が「楽しい時間を過ごすことができる」と答えており，子育て支援イベントの効果が伺える。また，「あなたの気持ちや意見を尊重してくれる」(93.8%)，「あなたの子育てをねぎらってくれる」(90.7%)，「不安な気持ちがすっきりし，楽になる」(90.2%)，「あなたの努力や心がけを評価してくれる」(88.1%)，「あなたの育児のやり方を認めてくれる」(87.0)「あなたの良いところをほめてくれる」(85.0%)，「自分の子育ての考えが他の母親と似ていて安心できる」(83.0%）といったように，８割以上の母親が，子育て支援イベントに参加することにより，子育てに対する不安を緩衝してくれ，子育てに対する自信を得ることができると答えていた。それは，「子育て以外でも話を聞いてくれ，安心できる」(85.6%)，「あなたの悩みを聞いてくれ，気持ちが静まる」(83.0%)，「不満やグチをよく聞いてくれ，気持ちがはれる」(73.1%）といったように，単に子育てイベントの体験だけでなく，悩みを聞いてくれる場として機能していることが分かった。また，「少しの時間だが，子どもから離れてリラックスできる」(81.3%）と答えた母親も多い。

図６は，子育て相談に対する意識であるが，「子育ての悩みを親身になって聞いてくれる」(92.3%)，「専門家がいるので安心して相談できる」(92.3%)，「子育てで感じたことや心配事を安心して相談でき

る」(90.8%),「問題や悩みに対して具体的な解決方法や助言をしてくれる」(86.5%)といったように,約9割の母親が子育て相談について高い評価をしていることが分かった。また,9割以上の母親が「経験者からのアドバイスを聞いて参考になる」(94.8%)「自分の子育ての仕方を見直すことができる」(93.8%)と回答した。さらに,子育て相談にとどまらず,「あなたの個人的な話を聞いてくれる」(72.7%),「個人的な気持ちを打ち明けることができる」(58.2%)と答えた母親も多く,子育て支援イベントを通じて,子育て支援の拠点となっている施設の職員と母親が深い信頼関係を形成していることが伺えた。

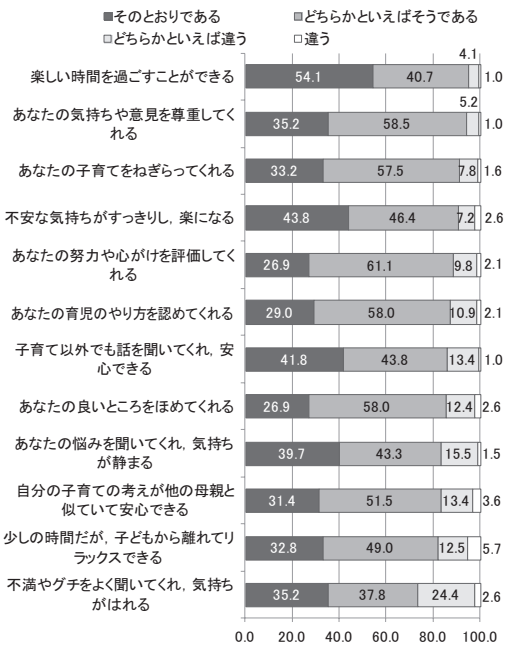

図5　育児不安解消・リフレッシュ意識

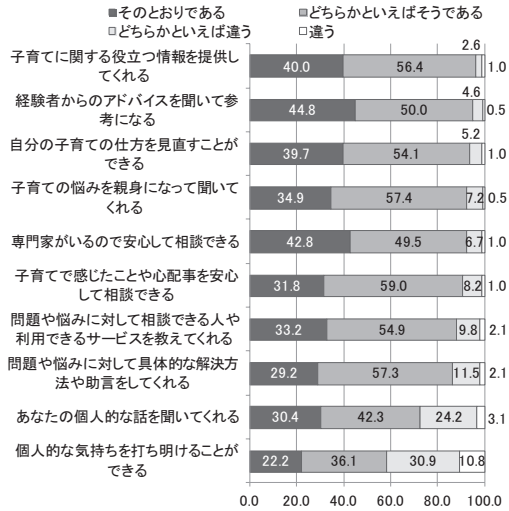

図6　子育て相談

さらには,「子育てに関する役立つ情報を提供してくれる」(96.4%),「問題や悩みに対して相談できる人や利用できるサービスを教えてくれる」(88.1%)といったように,子育て支援イベントを通じた子育て情報の提供の機会にもなっていることも分かった。

3．これまでに参加した子育て支援イベントの実態

表1は,これまでに参加した子育て支援イベントについて尋ねた結果で,185名から回答を得た。調査対象者が通っている地域子育て支援センターでの誕生会や季節の行事等のイベント(69名),認定こども園・幼稚園・保育園の園庭開放・わんぱく教室(29名)への参加が多いが,それ以外にも様々なイベントに参加していることが分かった。

イベントの内容としては,ベビーマッサージ(37名)や,体操を中心とした親子でできる遊び教室(29名),絵本の読み聞かせ(21名),クリスマス会(16名),音楽会(16名),リトミック教室(9名),運動会(8名),食育講座(8名),木工教室(5名)といった親子が一緒に参加できる内容が多かった。その他にも,子育て相談(24名)や母親同士の交流会(13名)への参加も多い。母親同士の交流会の中でも特に回答が多かった「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”(通称BPプログラム)」は,初めて赤ちゃんを育てている母親と0歳児の赤ちゃんが一緒に参加し,子育ての知識やスキルを学ぶだけでなく,参加した初対面の母親同士が自然と育児についての困ったことを気兼ねなく聞き合い,教え合える関係が築けるよう工夫された事業である。

その他にも,保育のある育児教室(6名)や母親自身のリフレッシュ講座(9名),子育てや夫婦のパートナーシップをテーマにした講座(9名),離

表１　これまでに参加した子育て支援イベント

項　　目	人数
地域子育て支援センターのイベント（見学，お誕生日会，季節のひなまつりや豆まき，運動，遠足，ふれあい遊びなどの行事等）	69
ベビーマッサージ（出産病院の教室・ベビーデー・ファーストサイン講習・骨盤ケア教室）	37
親子でできる遊び（触れ合い遊び・親子体操教室・親子エクササイズ・遊び講習・玩具づくりの会・バルーン体操・体育館でのハイハイ教室・親子でできる骨盤体操・子どもの手遊び）	34
認定こども園・幼稚園・保育園の園庭開放，子育て広場，イベント・行事，わんぱく教室	29
育児相談（支援センター・保健センター・助産師会・おっぱい相談）	24
絵本の読み聞かせ（図書館・親子で参加する絵本教室・講習・選び方・絵本セラピー・人形劇）	21
クリスマス会（明治クリスマスこども大会　等）	16
音楽会（子ども向け・親子コンサート・音楽を楽しむショー・わらべ歌会・音楽遊び）	16
母親同士の交流会（BPプログラム，ママ友との交流会・ママカフェ）	13
児童館のイベント（もちつきなどの行事等）	11
子育てひろば・サロン（ぽっかぽか・ほっぺ・子育て応援団レインボー・ゆめタウン子育てひろば・コープげんきっずくらぶ）	10
次世代育成支援イベント・おぎゃっと21	10
子育てをテーマにした講座・講演（歯並び講座），夫婦のパートナーシップの講習	9
離乳食（講習会・講座・教室）	9
リトミック（教室）	9
エアロビクス・ダンス・トールペイント・エコバック・チョコリース作り・スキンケア講習会・映画・藍染　等イベント	9
運動会・チャイルド大運動会	8
すきっぷ（ベビーデーや離乳食講座・誕生会）	8
食育（講座・講習）・クッキング・お料理教室・おかしの家作り	8
保育のある育児教室（クリスマスリース作り・フラワーアレンジメント，託児付きのヨガ・笑いヨガ）	6
大学のイベント・キッズルーム・子育て支援ルーム	5
木工教室・木の玩具の選び方・木の玩具で遊ぶ会・竹細工遊び	5
消防・救命・防災のイベント（イザ！カエルキャラバン，子どもとの避難方法など）	5
季節ごとのもよおし（夏祭りイベント・獅子舞等）	4
英会話・英語のイベント	3
ファミリーサポートセンターのイベント・講習	3
保健師による相談（身体計測＆交流会・健康診断）	2
シニアのボランティア団体のイベント	1
転勤族ママの会	1

乳食講習会（９名），次世代育成支援イベント「おぎゃっと21」（10名），防災のイベント（５名），英会話（３名），地域の季節ごとの催し（４名）など，多岐にわたっている。人数は少ないが，シニア団体主催のイベント（１名），転勤族ママの会（１名）といった内容も挙げられている。

イベントの場所としては，児童館（11名），子育てひろば・サロン（10名），徳島市の子育て支援拠点である「すきっぷ」（８名），大学（５名），ファミリーサポートセンター（３名）といった場所が多く挙げられていた。

４．大学に求める子育て支援

次に，表２は大学に求める子育て支援について尋ねた結果で，112名から得られた回答の分析から，８つのカテゴリーに分類して整理したものである。

まず，ニーズが高かった子育て支援は，「イベント・講習会の提供」で，中でも，親子で一緒に参加できるイベントの開催を求める声が多かった。また，気楽に参加でき子どもが楽しめるイベント，大学の施設を使ったイベント，子どもをみてもらえる託児付きのイベント，０歳児を連れても参加できるイベントを開催して欲しいという声があった。

次いで多かったのが，「子育て教室・講演会」で，子育ての専門家による講演，年齢や性別に合った子育て教室の開催を求める声が多かった。子育て教室の内容としては，離乳食や食育の教室，託児付きの料理教室の開催を求める声が多かった。また，大学内で開催されている「わんぱく教室」については，毎日開催して欲しいという意見もあった。

子育て相談については，発達障害など専門的な立場からの相談・アドバイスの窓口が少ないため，そのような子育て相談への対応を求める声や，子どもとの遊び方，かかわり方といった具体的な子育て相談，大学という場だからこそ提供できる育児や子どもの発達に関する相談対応を求める声が聞かれた。

また，「交流の場の提供」といった声も多かった。具体的には，同世代の子どもを持つ母親同士の交流の場であったり，子ども同士が遊べる交流の場であったり，学生との交流の場であったりと様々であるが，中でも，学生との交流については，大学ならではできる取り組みである。将来保育士を目指している学生との交流を求めている母親の声が複数聞か

表２　大学に求める子育て支援

イベント・講習会の提供
親子で一緒に参加できるイベント。（回答者：9名） （子どもと一緒に参加できる講座，とくに運動するのがいい。ぐずったときみてくれる人がいれば助かる。） 親子で楽しく体を動かしたり，コミュニケーションをとれるようになる講座。
気楽に参加でき，子どもが楽しめるイベントの提供。（回答者：5名） どんな母親・子どもでも，親子でも気兼ねなく，ふらっと参加でき，楽しめるイベント。小さな子どもにもできる遊び音楽や手遊びを楽しむイベント，創作など，自然を通した遊び（ツリーハウス，ハンモック，虫とり，屋外調理等）。 気兼ねなく親子参加できる音楽会（大学サークルの発表でいいです。本物の音楽，楽器を目，耳で触れさせてあげたい）。
自分1人ではできないイベント。（回答者：5名） ベビーマッサージ，わらべうたあそび，リトミックなどダンス，移動絵本の読み聞かせ，リズムあそび等。
大学の施設を使ったイベント。（回答者：3名） （赤ちゃん連れでもいけるコンサートや運動，大学の広いスペースを活用した運動等）。
子どもをみてもらえるイベント。（回答者：4名） 託児ありの講座。 託児ありの趣味の会(リース作り，フラワーアレンジメント,ポーセラーツ,料理など)。 子どもをみてもらっている間に何かできるのはよかったです。何か作る以外にもヨガや軽い運動があったらうれしい。
0歳児を連れて参加できるイベント。ママとの交流がもっとできるイベントを開催してほしい。
子どもを遊んでくれ親は周りで見ていられたらとっても幸せです。
休日に子どもが遊べるようなイベント。
無料のイベント，講習。
子育て教室・講演会
専門家の講演。（回答者：4名） マタニティや月齢が小さい子向け講演。 教育関係者，保育専門家の方などの育児に関する講演会があれば参加してみたい。 親子或いは託児サービス付きの短期講義（一般向けの大学の講義）。 生活リズム，子育て支援などでは教えてもらえなさそうな座学など。リトミックなどもあれば参加したい。
年齢・性別に合った子育て教室。（回答者：4名） 年齢に合った遊び，絵本等を教えてほしい。 歌あそびや手遊びをたくさん教えてほしい。 遊びながら，体操や勉強を子どもに教えてほしい。 男の子の育児について学ぶ機会（講演会）。 学習できる教室を開いてほしい（英語，体操など）。
離乳食や食育の教室。（回答者：4名） 離乳食の相談や試食，離乳食の実習。 食育に悩んでいるので,保育園のおかずの作り方などを教えて欲しい。 子どもの食べ物について聞きたい。
保育つきの料理教室(外でおいしいものを食べる機会にもなるしママさん同士の交流にもなりそう)。
親子で習べる教室。 親子の触れ合い，友達作り。
毎日同じ場所でのわんぱく教室をしてほしい。 （子ども慣れる。週１回だと少ない。）
子育て相談
専門の先生による育児講座や育児相談。（回答者：4名） 子育て相談に対して専門的なアドバイスがあれば良い。 大学という場だからこそ提供できる育児や子どもの発達等に関する講演会＋その際の託児サービス。 （発達障害など）専門的な立場からの相談・アドバイスの窓口が少ない。
子育て相談，何でも始めるときは本や教室でわかるのに，いつ頃やめてよいか（消毒など）教えてもらえるとありがたい。
絵本の紹介，育児相談。
月齢，年齢による子どもの感情（反抗期，イヤイヤ期）などの付き合い方など教わりたい（意見交換など）。
子どもとの遊び方（例：手遊び，工作，歌など）。
子どもとのやりとり（言葉がけのやり方，ダメなことの伝え方の実践）（体を使って，ふれあって遊ぶやり方，家での遊び）。
子どもと一緒に物づくり体験,どのような遊びをすれば子どもにとっていいのかなど。親子のコミュニケーションの取り方。
習いごとなどの相談。

交流の場の提供
同世代の子どもをもつ母親と話しをする場を作ってほしい。
同年代のお子さんをもつママさんとの交流イベント。
（ママ）カフェがすごくいいと思う。
「ママカフェ」がある事を知らなかったので，もっと存在を広げる活動をしてもらいたいです。どこかに行きたくても,どこに行けばよいか，また，誰かに話したくても何をどんな風に話せば良いかわからずモヤモヤしながらも，子どもの明るさと優しさに助けられて日々過しています。
ママカフェとても良かったです。保育士を目ざしている学生さんたちなので安心して預けられるし,一生懸命子どもをみてくれたのでその間リフレッシュできました。これからも年に一度と言わず回数を増やしてほしいです。
ママカフェなんてすてきだと思います。子どもを遊ばせながら,お母さんどうしでほっとお茶をのんだりできたらいいな。
ママカフェは参加したことがないですが,今後はぜひ参加したいです。親子で手作りでおもちゃを作ったり,みんなでお茶やお菓子を食べながら交流したいです。
「ママカフェ」に行ってみたいと思います。
同じような立場の人や，その他の人と話する場があると，日ごろのバタバタを忘れる事ができる。子どもともゆっくり遊べる場もうれしい。
子どもと親同士の交流のイベントなど。
親や兄弟以外との交流会。
（子どもが遊ぶ・母親同士の交流）場の提供
子どもがたくさん遊べるおもちゃなどたくさんあったらママ達もゆっくりできると思います。
親から離れて遊べるキッズスペースが充実していたら少し休めて嬉しい。
小さな子が遊べるスペースや親子で楽しめるイベントを多くつくってほしい。
子どもの遊べる場所の提供，親子でゆっくり出来るスペース。
子どもと一緒に参加して，子どもが自由に遊びまわってもまわりを気にせずに過ごせる空間での支援。
子どもが自由に遊んでも不安にならない場所。一緒におやつができる所。
大学の中に子育て支援カフェ（キッズスペースのあるカフェなど）。
母親，子ども同士でコミュニケーションがとれる（とりやすい）環境・空間。
無料で楽しめて母子で楽しめる教室。大学の子育て支援室の開室時間を17時までな延ばしてほしい。
子ども連れでも気軽に行けるカフェ，短時間の託児施設（就学前を対象），大型施設や公共の場でのキッズスペース。
無料又は1コイン（500円くらい）で遊べるフリースペースが欲しい。
母親同士が交流できる場が欲しい。
学生との交流
学生との交流。
保育を専攻している学生との交流。（回答者：3名） 保育士をめざしている学生さんと一緒に遊ぶ。 将来保育士を目指している学生の方と交流してみたいです(親子で参加できるようなイベント)。
学生が子どもと遊んでくれるような場所づくり。
子どもと大学生（お兄さんやおねえさん）との交流。
学生さんと子どもたちのふれあい，遊びの実践など，遊び方を教えてほしい，自然体験など。
相談やイベント，学生さんが何かするイベント（遊びや歌など）。
学生さんとの交流を定期的に開催してもらうとお母さんの気持ち（子育てにいきづまっているときなど）がかわってよさそう。
専門の先生とのかかわり,学生さんとのかかわり。
一時預かり
一時保育サービスなど。
一時間でも短時間でも子どもを見ていただける預かり制度。
一時的に子どもを預かってくれるようなもの。
子どもを見てくれて，ゆっくりママが過ごせる時間。
（大学のイベントに）参加したことがありますが，リフレッシュの時間を作ってくれてたいへん良かったです。またしてください。
教員免許の講習を受けた時，子どもを預ける時にとても困りました。講習中に大学の学生さんでも良いので，預ける所があればと思いました。
子育て情報の発信
大学のイベントの情報発信。（回答者:5名） イベント等のチラシも置いて欲しい。「ママカフェ」は初めて知りました。 こういったイベントをしている事を知らないのでもっと広く知らせて欲しい。 大学でそうゆうイベントがあることを知らなかった。 参加したいが、いつあるのかわからない。 その活動自体知らなかった。もっと周知してほしい。
最新の育児に関する情報。
近くの子育て情報を教えてほしい。
専門的な知識で子育てに役立つ情報　例えば〇〇才ぐらいから自我が芽生え反抗的な行動が増える…など知っていれば子育てが楽になったりすることもあるかと思います。

れ，定期的に学生との交流の場を設け，子育てに行き詰っている母親の話を聞いてもらうことで，学生は母親の気持ちが分かり，一方で母親は話を聞いてもらうことでリフレッシュできるのではといった意見もあった。

また，子どもの「一時預かり」の声からも分かるように，学生が子どもと遊んでいる間に，母親同士の交流の時間を持ってもらう「ママカフェ」の取り組みを，「子育て情報の発信」も含めて，もっと広げてもらいたいという声も多かった。

その他の意見としては，子育て支援イベントの地域格差に関するものがあった。具体的な声として「公の施設は魅力的なイベントがあっても，その市に在住する人という条件があったりして参加できないので，大学を広く開放してほしい」「保育園等に通っていない子たちがもっと参加できる場を増やして欲しい。逆に通っていても，土，日曜日に親子で参加できるイベントがもっと田舎であってほしい」「田舎では近くで子育て支援のイベントが少なく参加しづらいので，田舎でもして欲しい」「徳島は車が当たり前なので，自動車に乗れないと近場でないとなかなか行けないことが多い。継続して行ける場所でないと，新しい友達はできにくい。かといって出欠のしばりがあると予定通りにいかないこともあるので気が引ける」という声もあった。

以上のように，大学主催の子育て支援イベントを遠隔地も含めて行って欲しいという意見が多い中で，それとは異なる意見もあった。それは，「県内でも既に沢山の子育てイベントが実施されている。また，日々に追われているのでイベントに参加するよりも休みたいというのが本音である。大学は，イベントを実施するよりも，専門性の高い人材を育成することに力を入れてほしい。」という意見であった。

Ⅳ．まとめと今後の展望

本研究では，本学が地域の拠点として，新たな子育て支援活動を展開していくために，まず，子育て中の母親が参加している子育て支援イベントの実態や大学に求める子育て支援イベントのニーズを把握することを目的とした。その結果，次のような主な知見を得た。

1）多くの母親が肯定的な母親意識を持ちつつも，悩みや不安を抱えながら子育てをしており，母親は子育て支援イベントへの参加や育児相談，母親同士の交流を通じて，子育て対する不安を緩衝していることが分かった。

2）地域子育て支援センター，認定こども園・幼稚園・保育園の園庭開放・わんぱく教室でのイベントへの参加が多いが，それ以外にも，親子が一緒に参加できるイベントや子育て相談，母親同士の交流会など，地域の様々なイベントに参加しながら母親が子育てをしていることが分かった。

3）大学に求める子育て支援は，母親の回答の分析により「イベント・講習会の提供」「子育て教室・講演会」「子育て相談」「交流の場の提供」「（子どもが遊ぶ・母親同士の交流）場の提供」「学生との交流」「一時預かり」「子育て情報の発信」の8つのカテゴリーに整理された。イベントや講習会の提供の他，母親同士，子ども同士，大学生との交流の場の提供を求める声が多かった。

本研究の調査対象者は，主に地域の子育て支援センターを利用している無職や育児休業中の母親が大多数であり，子育て中のすべての母親の子育てニーズを反映したものではない。今後の課題としては，有職者を対象とした調査をし，大学に求める子育て支援のニーズをさらに探究していくことが課題である。

大学の特色を全面に活かした子育てイベントとしては，学生との交流を挙げることができるが，今回の調査においても母親からの要望が多かった。少子化時代に生まれた現代の学生は，子どもとの接触体験が少ないために，子どもや子育て観を描きにくい状況にある。子育て中の親子との交流は学生にとって，実践的な子どもとの関わりを学べる場となり，子育て支援に対する理解を深めることができる[6)7)]。また，将来，保育に関わる仕事に就く学生だけでなく，将来親になる学生にとっても，親子の触れ合い

を直接目で見たり，母親から実体験を直接聞くことで，子どもの成長・発達や生活状況のイメージを具体的に膨らませたり，親としての人間的成長にも気付くことができる機会が得られる[8) 9)]。しかし，一方で，子どもとの接触体験の多さと子どもへの関心とは関連がなく，むしろ接触体験が多いと苦手意識になるという指摘もある[10)]。このことからも，接触体験の量ではなく，学生にとって意味のある活動であるかどうか，内容を検証しながら実施していく必要がある。

また，母親が大学に求める子育て支援としては，「イベント・講習会の提供」が多かったことから，今後，子育て支援を担える専門職者を最大限に活用し，親や地域が求める子育て支援に応えていく必要がある。しかし，そのためには，継続的に子育て支援イベントを拡充していく必要があり，負担の少ない運営システムを構築することが，今後の検討課題である。

Ⅴ．文献

1）中岡泰子，小川佳代，富田喜代子他，2013.「徳島県における子育て支援ニーズに関する調査研究（その1）― 子育ての悩みやストレス解消法の地域比較 ―」，四国大学紀要人文・社会科学編，40，1－12.

2）小川佳代，中岡泰子，富田喜代子他，2013.「A県における子育て支援ニーズに関する調査研究（その2）― 育児ストレッサーの因子構造 ―」，四国大学紀要人文・社会科学編，40，13－19.

3）石原留美，小川佳代，江口実希，2013.「乳幼児を育てる母親の育児ストレスに関する文献検討：育児ストレスの要因から育児支援の課題を考える」，地域環境保健福祉研究，16(1)，1 － 8.

4）高橋順子，小川佳代他，2016.「大学を拠点とする子育て支援イベントに参加した母親の反応」，四国大学紀要人文・社会科学編，46，1－8.

5）大日向雅美，1988.「第7章　研究Ⅲ：母性意識の発達変容について」，『母性研究』，川島書店，135－169.

6）新山順子，京林由季子，樟本千里，高橋多美子，2017.「大学を拠点に保育者志望学生と多世代が交流する新しい子育て支援の実践：「そうじゃ子ども大学」の事例から」，岡山県立大学教育研究紀要，1（1），41－51.

7）小島佳子，2017.「保育者養成短期大学を拠点とした地域子育て支援の場づくり：「すずたん広場」の運営を通して」，鈴鹿大学短期大学部紀要，37，183－195.

8）吉見昌弘，2009.「大学を拠点とした子育て支援活動の展開と課題」，愛知教育大学幼児教育研究，14，81－89.

9）大林陽子，岡田由香，緒方京，2011.「大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価」，愛知県立大学看護学部紀要，17，33－39.

10）野村幸子，河上智香，長谷典子他，2007.「子どもとの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ」，人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌，7（1），169－180.

本研究は，「四国大学学術研究助成」を受けて実施された。また，調査の実施にあたっては，地域子育て支援センターのご協力を得た。本調査にご協力頂きました多くの方に心より感謝申し上げます。

抄　　録

本研究の目的は，A 県における子育て支援イベントの利用実態を明らかにすることである。この目的を達成するために，子育て支援イベントに参加した212名の母親のデータを集めた。主な知見は次のとおりである。

1）親子が一緒に参加できるイベントや子育て相談，母親同士の交流会など，地域の様々なイベントに参加しながら母親が子育てをしている。

2）多くの母親が子育て支援イベントへの参加により，子育ての不安を緩衝していた。

3）大学に求める子育て支援として，子育てイベントの開催，親子と学生の交流の場を望む母親が多い。

キーワード：子育て支援，親子と大学生の交流，イベント